

A 大学における学士課程保健師選択選抜教育の現状と課題
- 選抜学生の意見を通して -

Future challenges for public health nurse program in a selection system
in A University- Through the student's opinions in the program -

三輪眞知子 高畑陽子 上田晴美

MIWA Machiko TAKAHATA Yoko UEDA Harumi

西内恭子 河村圭子

NISIUCHI Kyoko KAWAMURA Keiko

キーワード：学士課程 保健師教育 選択選抜制 保健師学生

Key words : Undergraduate course Public health nursing program Selection system

Student's in public health nurse program

本研究の目的は A 大学学士課程における保健師選択選抜教育の現状と課題を明らかにし、今後の保健師教育の改善に役立てることである。選抜学生有志 13 名を調査対象とし、応募した理由、授業・実習の感想などについて質問紙調査、フォーカスグループインタビュー（以下 FGI）を実施した。選抜学生の成績は同学年平均よりやや高く、応募理由は「多くの資格が欲しい」が 76.9%、「保健師になりたい」学生は 1 名であった。講義等の感想は「看護の学習と同時進行で大変」が 76.9%、「学習進行や学習量が多くて興味が薄れていった」が 53.8%、保健師として就職した学生は皆無であった。FGI から【保健師を目指す準備の必要性】【満足感】、【不満感】、【保健師の特徴への気づき】、【就職への躊躇】、【看護師への逃避】の 6 つのラベルが抽出された。課題として①保健師専門職への興味関心の喚起、②保健師として就職する関門の突破、③保健師の質担保に向けた教育プログラム構築の 3 点が課題と考えられた。

はじめに

保健師教育は 2010(平成 22)年 4 月「保健師助産師看護師法（以下保助看法）」及び「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の一部改正法が施行され、保健師の修学年限が「半年以上」から「1 年以上」に延長された。同年 8 月には文部科学省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」中間報

告を受け保健師国家試験受験資格を大学の卒業要件から外すことが可能になり、大学における保健師教育は I. 学士課程での全員必修、II. 学士課程での選択制、III. 1 年間の専攻科、IV. 2 年間の大学院課程または専門職大学院、の 4 つのタイプで行うこととなり、その選択は各々の大学に任された。現在の保健師教育は選択制を約 9 割の大学が導入してい

るが同じ資格取得であるにも関わらず教育のタイプは異なり保健師教育の質確保に大きな課題を残している。このような中で、一般社団法人全国保健師教育機関協議会（以下全保協）は今後の取り組む課題対応について以下の4点を挙げて保健師教育の授業や実習の質確保に取り組んでいる。①学部選択制実習の質を評価する「実習ガイドライン」を作成する。②2011（平成 23）年度入学生より選択制を始める大学の実習を評価する。③学部選択制、大学院修士課程での教育になった場合の需給バランスを示す。④看護師教育課程、保健師教育課程の教授内容を明らかにする。

しかし、保健所や市町村保健センターにおける新卒保健師の実態は実習では家庭訪問は1回のみ同行訪問だったのに就職後すぐに多問題家族や児童虐待など深刻な事例を担当することで戸惑いや不安が大きい（岸,2013）

さらに、担当地域の地域診断の課題が出されたが実習では地域診断は割り当てられた箇所のみしか学習しなかったため、その一連の展開方法がわからず、どうしたらよいか戸惑うなど地域診断についての知識技術にも不安を抱えている卒業生もいる。このことは新卒保健師のストレスになると共に、先輩保健師の業務量にも影響を与え、各々が負担感や疲労感を感じる事となり、保健所や市町村保健センターの保健師の活動にも影響を及ぼしている。保健師基礎教育を担う教員としては基本的なスキルを習得させ、専門職としての素地と使命感を持たせて卒業させることができていないとその責任を感じている。

A 大学では、学士課程における保健師選択選抜教育（以下選抜教育）を指定規則改正前に一足早く開始したが、看護師教育課程の実習が不合格となり、保健師教育課程が履修できない学生、授業の進行と共に興味関心が薄れて辞退する学生が出現、さらに、保健師選択選抜学生全員が看護師として病院に就職するという事態に遭遇した。

そこで、A 大学における学士課程の保健師選択選抜教育の実態を把握し、課題を明確にした上で改善策を導き出したいと考え、本研究に取り組むこととした。

I. 研究目的

A 大学学士課程における保健師選択選抜学生への調査から選抜教育の現状と課題を明らかにし、今後の保健師教育の改善に役立てる。

II. 保健師教育課程カリキュラム

1. 科目構成（2011 年度入学生）

看護師・保健師教育課程の共通科目は、保健師教育課程の概論的な科目として「地域看護学」、「地域看護学演習」、「保健医療福祉行政論」とした。「地域看護学演習」では大学の近辺の地区踏査を行い、母子と高齢者の健康と環境のつながりについて体験を通して考えさせ、予防の視点を強調した。疫学・保健統計科目として「公衆衛生学」、「保健統計学」を位置づけ、看護師教育課程の中に看護の対象を疾病との関連のみでなく、健康と環境とのつながりの視点をもたせ、より豊かで幅広く生活環境とつながりが理解できることに配

慮した。

保健師教育課程科目は個人・家族・集団の生活支援、地域看護活動展開、地域看護管理を含めた内容として「地域看護学概論」及び「地域看護学活動論」とした。保健師が活動する場は行政のみではなく、産業、学校に広がりつつあることやA大学の特徴及び教育的機能を強化するために「産業保健学」、「学校保健」、「健康教育論」を独立した科目として設定した。また、保健師免許取得後申請した際にスムーズに養護教諭二種免許取得できるよう教育職員免許法施行規則により指定された「憲法と人権」を必修科目とした。

2. 実習

2011(平成 23)年度入学選抜学生(Ⅱ期生)(以下選抜学生)は公衆衛生看護学実習3単位であるが、指定規則が改正された2012(平成 24)年度入学生(Ⅲ期生)以降は5単位の实習となったため、行政機関である保健所・保健センター実習は4週間、産業の場における実習1週間の実習を行っている。

看護師教育課程では地域看護学実習は実施していないが「母性看護学実習」の産婦人科外来実習では個別・集団の健康指導や1か月健診を見学、「小児看護学実習」においては幼稚園実習を1週間行い幼児期の発育発達について観察を行っており、保健師の対象である健康な母子について体験的な理解ができるように工夫している。「在宅看護学実習」においては訪問看護ステーションで実習を行っており、地域に生活する療養者の対象理解と取り巻く社会資源の理解ができるよう配慮して

いる。

3. 研究対象学生の選抜の条件と志望者数

選抜学生は、入学時、2年次地域看護学演習終了時にガイダンスを行い、周知した上で2年生後期後半に応募申請を受理し、選抜基準に基づき20名を選抜した。(学生数92名、応募者数36名)。選抜基準は2年次終了までに開講される保健師教育課程にかかわる精神保健学、公衆衛生学、保健統計学、保健福祉行政論、地域看護学、地域看護学演習、健康教育論、学校保健の8科目の単位を取得していること及び8科目の総合点から原則として成績上位20名を選抜する、である。選抜された20名の4名が脱落し、最終的には16名となった。4名中1名は看護師教育課程の臨床実習が不合格、1名は授業途中で辞退、1名は地域看護学実習不合格、1名は保健師国家試験未受験であり、保健師国家試験受験資格者及び合格者は16名であった。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象者

選抜学生(Ⅱ期生)16名を対象としたが、3名が当日に所用ができ、欠席したことから質問紙調査、FGIの実施対象者は13名であった。

2. データ収集期間及び方法

1) 期間

平成26年12月17日(水)9:00~10:30
(4年次全ての教科目終了後で学生が都合がつく時間帯)

2) 方法

- (1) 自記式による質問紙調査
- (2) フォーカスグループインタビュー（以下 FGI）

3) 調査内容

- (1) 自記式による質問紙調査内容

①大学受験の時に保健師を目指そうと思っていたか、②選抜教育に応募した理由、③選抜教育における授業の感想、④地域看護学実習の感想、⑤保健師の仕事についての感想、⑥保健師採用試験未受験の理由、⑦保健師採用試験受験に際しどのような支援があったらよいと思うか、⑧病院などで臨床経験をした後に保健師採用試験受験を考えているか。

- (2) FGI

質問紙調査はパターン化しているため、選抜学生が授業や実習体験を通して選抜教育に対して抱いた思いを明らかにすることを目的として FGI を実施した。教員 2 名が、司会者と観察者になり半構成的面接法にて実施した。内容は選抜教育に応募したきっかけや思い、授業・実習に対する感想・意見、就職に向けての思い等で、研究対象者の承諾を得て IC レコーダーに録音し、逐語記録を作成した。

3. 分析方法

- (1) 質問紙調査

分析は、質問項目ごとに回答者の割合を求めた。分析は全て Microsoft Excel 2010 を用いて行った。

- (2) FGI

質的統合法（KJ 法）（山浦,2008）を用いて分析を行った。質的統合法（KJ 法）は現象の実態とその本質をつかもうとする質的分析

方法であり、単位化されたカードの全体から‘類似と相似’を見ていく考え方に立つものである。状況の意味を損ねずに実態が具体的に浮かび上がるように表現しながら、‘類似性のパターン認識’を用いて段階的に抽象度を上げていき、最終的に‘関係思考による意味の論理認識’により導かれる空間配置図によって現象に含まれる論理的関係を現していくという手法である。選抜学生が語った思いから選抜教育に対する本質を明らかにしたいと考え、この分析方法を選択した。分析手順は以下のとおりである。

- ① ラベル作成

FGI の逐語録から対象者メンバーが抱いていた思いを取り出し 1 つの意味ごとに区切り、なるべく語られた表現のまま 60 字～120 字程度の 1 文にして 1 枚のラベルとした。

- ② グループ編成

ラベルのすべてに目が行き渡るように一面に広げ、ラベルの文章全体で訴える意味の全体感が似ているものを 2～4 枚集めてグループ編成した。集まったラベルのセット全体の意味を読み取り、表札として一文に綴った。このグループ編成プロセスを 1 段階とし、表札をつけたラベルと残ったラベルで同じ作業を行い、段階が上がるごとに集める際の類似性の距離感、抽象度をあげ、ラベルの枚数が減っていく作業を繰り返し行った。ラベルが 6 枚になるまで行き、最終ラベルには内容を短い言葉で表す「シンボルマーク」をつけた。

- ③ 空間配置図及びストーリーの作成

グループ編成の最終ラベル同士の間関係を

読み取り、空間配置図を作成した。ラベル同士の関係を示す「添え言葉」を使って、空間配置図を簡単に説明する文章を作成し、事例のもつ全体のストーリーとした。

4. 信頼性と妥当性

(1) 質問紙調査

質問紙調査は無記名とし、データの信頼性と妥当性の確保に努めた。さらに、地域看護学実習及び4年次の全ての教科目終了後に実施することで、調査者と回答者の関係が回答結果のバイアス要因とならないよう努めた。

(2) フォーカスインタビュー

分析は地域保健活動の経験を持つ3名の研究者で行い、解釈の恣意的な偏りを防ぐように努めた。

5. 倫理的配慮

研究対象者には、研究の目的及び内容、本研究以外でデータを使用しないこと、無記名であること、自由意志による研究の協力であり参加しない場合であっても不利益がないこと、ライバシーの保護、研究成果の公表等について文書と口頭で説明し同意書への署名を得た。但し、当日に欠席した3名は口頭での説明とした。

IV. 研究結果

1. 選抜学生の概要

選抜学生の成績は他同学年学生に比べ、やや高い傾向であった。看護師国家試験模擬試験は6月および9月は、選抜学生と他同学年学生との間でほぼ同様の結果が見られた。10月になると他同学年学生では正答率が高く、

選抜学生はほぼ横ばいで、同学年学生の方が、模試結果はかなり伸びている事が分かった。しかし、10月と12月の結果の伸びは両者ともに変化はなかった。

選抜学生の就職先は看護師教育課程の実習施設である病院が31%を占めており、保健師として都道府県や市町村、産業への就職は全くいない状況であった。

2. 学生への質問紙調査結果

1) 大学入学前後の保健師に対する認知

大学入学前に保健師について知っていた学生は53.8%であり(表1)、大学入学時点において、保健師を目指していた学生は2名であった(表2)。

2) 選抜教育への応募理由

応募した理由では「多くの資格が欲しい」が76.9%と最も多く、次いで「親等からの勧めが38.5%、「保健師になりたかった」と回答した学生は1名であった(表3)。

3) 保健師教育課程における授業及び実習

講義・演習についての感想では、「看護師課程の授業と同時進行で大変だった」76.9%、「興味関心は持てたが学習進行が速く学習量が多くてだんだん関心が薄れていった」53.8%、「抽象的で理解しにくかった」30.1%の順であり、学習量の多さや抽象度が高いことに関するネガティブな感想が多かった(表4)。一方で、「授業は人数が少なく、グループワークはやりやすかった」という自由記載もあった。

実習については、「実習に行って保健師と出会い保健師っていいなと思った」69.2%、

A 大学における学士課程保健師選択選抜教育の現状と課題

表 1 保健師という職種があることを知った時期

	中学生以下	高校生	大学生	合計
回答数	1	6	6	13
(割合)	(7.7%)	(46.1%)	(46.2%)	(100.0%)

表 2 大学受験時に保健師を目指そうと思っていたか

	はい	いいえ	その他*	合計
回答数	2	10	1	13
(割合)	(15.4%)	(76.9%)	(7.7%)	(100.0%)

*その他内訳：少し興味があった(1)

表 3 選抜教育に応募した理由(複数回答)

n=13

	親等からの勧め	多くの資格が欲しい	保健師になりたかった	その他*
回答数	5	10	1	1
(割合)	(38.5%)	(76.9%)	(7.7%)	(7.7%)

*その他内訳：災害時に保健師が活躍しているのを知って、勉強してみたいと思った(1)

表 4 選抜教育授業の感想(複数回答)

n=13

	抽象的で理解しにくかった	看護師教育の授業と同時進行で大変だった	興味関心が持てなかった	興味関心は持てたが学習進行が速く学習量が多くてだんだん関心が薄れていった	興味関心が授業を受ける前より強くなった
回答数	4	10	1	7	1
(割合)	(30.8%)	(76.9%)	(7.7%)	(53.8%)	(7.7%)

表 5 地域看護学実習の感想(複数回答)

n=13

	事前学習については数値や資料がない中での地域診断は達成感がなかった	グループワークが進まずしんどいだけだった	実習と事前学習のつながりが持てず戸惑った	実習スケジュールが過密で学んだことを整理する時間がなかった	住民との出会いに感動した	実習に行って保健師さんと出会い保健師っていいなと思った
回答数	7	6	6	5	2	9
(割合)	(53.8%)	(46.2%)	(46.2%)	(38.5%)	(15.4%)	(69.2%)

表 6 授業や実習を経験して、保健師の仕事についてどのように感じたか(複数回答)

n=13

	思っていたより大変な仕事だと感じた	保健師より看護師の仕事に魅力を感じた	保健師になる前に看護師の経験を積む必要があると思った	その他*	無回答
回答数	6	3	5	1	1
(割合)	(46.2%)	(23.1%)	(38.5%)	(7.7%)	(7.7%)

*その他内訳：事務仕事が多い

表 7 保健師採用試験を受験しなかった理由(複数回答) n=13

	看護師として就職したかった	公務員試験が難しいと思った	採用試験準備ができなかった
回答数	13	3	2
(割合)	(100.0%)	(23.1%)	(15.4%)

表 8 保健師採用試験受験に向けてあったら良いと思う支援(複数回答) n=13

	公務員試験模擬	エントリーシート ・面接訓練	採用試験についての 情報提供	無回答
回答数	10	2	4	1
(割合)	(76.9%)	(15.4%)	(30.8%)	(7.7%)

表 9 病院などで臨床経験をした後の保健師採用試験受験を考えているか

	はい	いいえ	どちらともいえない	総計
回答数	2	4	7	13
割合	(15.4%)	(30.8%)	(53.8%)	(100.0%)

「事前学習については数値や資料がない中で
の地域診断は達成感がなかった」53.8%、「実
習と事前学習のつながりが持てず戸惑った」
46.2%、「グループワークが進まずしんどい
だけだった」46.2%、「実習スケジュールが過
密で学んだことを整理する時間がなかった」
38.5%の順で、7割の学生は保健師との出
会いにより保健師の魅力を持った一方で、約半
数の学生は事前学習と実習とのつながりに
ついての不満を感じていた。しかし、「住民との
出会いに感動した」と2人の学生が回答して
おり、住民と直接出会うことで保健師の活動
に醍醐味を感じていた(表5)。自由記載には
「看護との両立だったので大変だったが、実
習が楽しかった」、「保健師のイメージを持
てるようになったので、頑張ってきた」など
の回答があり、大変だったという気持ちの一
方で、楽しかったり、イメージできることで
実習が乗り越えられていた。また、「地域に帰
った後の他職種間の連携やケアについて知る

ことができ、看護師の視点が広がる」、「保
健師課程で学んだことは、看護師にもつなが
ることが多いので、選択して良かったと思う」
など、看護師として役立つとの記載もあった。

4) 選抜教育の授業・実習後に感じた保健師の 仕事

「思っていたより大変な仕事だと感じた」
46.2%、「保健師になる前に看護師の経験をつ
む必要がある」38.5%、「保健師より看護師の
仕事に魅力を感じた」23.1%の順で保健師よ
りも看護師の仕事に魅力を感じる回答が多か
った(表6)。

5) 保健師採用試験

保健師採用試験を受験しなかった理由は
全学生が「看護師として就職したかった」と
回答し、23.1%が「公務員試験が難しいと思
った」と回答した(表7)。また、保健師採用
試験受験に向けての支援は「公務員試験模試」
76.9%、「採用試験についての情報提供」
30.8%、「エントリーシート・面接訓練」15.4%

の順であった(表8)。自由記載では「保健師の就職試験は早いので、もう少し就職活動について早めに情報提供があったり、面接や試験に対する支援があれば保健師を目指す学生も増えると思う」との記載もあった。

6) 保健師としてのキャリア

臨床経験後の保健師採用試験受験を考えているかは、53.8%が「どちらとも言えない」と回答し(表9)、半数以上の学生が保健師のキャリア選択について将来像を描けていなかった。

3. 学生への FGI の結果

1) ラベル作成とグループ編成

13名の参加者による FGI を60分程度実施した。逐語録から取り出した元ラベルは110枚、1段階56枚、2段階39枚、3段階30枚、4段階21枚、5段階13枚、6段階で最終ラベル6枚となった。ラベル番号は段階が上がるごとに、「A00X」「B00X」「C00X」と表示し、残ったラベルは元の番号のままグループ編成に使用し、どの段階で集められたかが常に検証できるようにした。6枚の最終ラベル同士の関係を示す空間配置を行い、シンボルマークとしてその性質を抽出した(図1)。

以下にその内容を記述する。なお、【 】はシンボルマーク、<>は最終ラベルを示す。

(1) 【保健師を目指す準備の必要性：覚悟の上での選択と保健師の魅力満載の授業の必要性】

これは<事前にメリットデメリットを伝え、保健師になる覚悟と見通しを持って選択させると共に、授業は、保健師の魅力が具体

的に伝わる工夫をして、保健師の仕事に興味・関心を持たせることが必要だ>という選抜前の覚悟と選抜後の興味関心を抱かせる授業や選抜前後の準備の必要性の性質が抽出された。

(2) 【満足感：授業と実習における必死な努力の後に得た達成感】

これは<保健師課程の授業や実習は、辞めたくなるほど大変で、努力しないと全うできないと思っていたが、実習で多くの体験をさせてもらい、指導保健師の助言や、実習メンバーで協力し合えたことで、今は、満足している>という学生が自ら努力したことや実習指導者、実習グループの仲間の支えで遣り遂げられた満足した思いの性質が抽出された。

(3) 【不満足感：授業の不十分な理解と実習時間不足による課題の未達成感】

これは<地域診断や健康教育の理解が不十分なまま実習に突入し、実習中は考えたり話し合ったりする時間が確保できなかったこともあり、個人やグループの課題が十分にやり遂げられず、不消化感が残っている>という授業の理解不足や時間不足により、理解が浅く自分のものになっていないという満たされないモヤモヤした不満足な思いの性質が抽出された。

(4) 【保健師の特徴への気づき：家庭訪問でわずかに気づいた保健師のケアの特徴】

これは<保健師の家庭訪問においても観察・アセスメントは基本であるが、保健師は、対象が病気の人のみではなく(健康な人や境界域の人が含まれ)幅が広く、バイタルサイ

ンチェック（体温や血圧測定）をしないことがあるなど、対象に応じた支援方法において、看護師とは違った>という看護師とは異なる保健師の援助方法への気づきであり、基本は看護師と同じであるが、あらゆる健康レベルの人を対象とすること、必ずしもバイタルチェックしないこと、対象のニーズに合わせて援助方法を変化させていることに特徴を見出していた。

(5) 【就職への躊躇：保健師としての就職までの道のりは難解】

これは<保健師の就職は、看護師の勉強もしなければならぬ中、就職に関する事前情報があまりに少なく、どのように就職先を選択したらよいかわからず、更に採用試験は回数も多く、難しいと感じ、看護師の方が手取り早く就職できる>という、保健師として就職するにはいくつものハードルを越えなければならないという負担感が先行し、保健師として就職することへの戸惑いと迷いの性質が抽出された。

(6) 【看護師への逃避：荷が重すぎるから、まず、看護師経験】

これは<保健師には主体性と責任感が求められ、まだその準備ができていないし、学んだ知識は、保健師の活動以外でも役立つから、まず、看護師の経験をしよう>という保健師として就職しなくても学んだことは活かせるから看護師として就職しようと、保健師として就職することから逃げようとする思いの性質が抽出された。

2) 最終ラベルの空間配置図

6つの最終ラベルの関係性に着目して得た空間配置図を図1に示した。

学生は授業や実習体験を通して、【満足感：授業と実習における必死な努力の後に得た達成感】を得ているが、もう一方で、【不満足感：授業の不十分な理解、実習時間不足による課題の未達成感】があった。そんな中での実習では【保健師の特徴への気づき：家庭訪問でわずかに気づいた保健師のケアの特徴】はあったが、【就職への躊躇：保健師としての就職の道のりは難解】があり、加えて【看護師への逃避：荷が重すぎるからまず、看護師経験】となっていた。これらの思いの基盤には【保健師を目指す準備の必要性：覚悟した上での選択と保健師の魅力満載の授業の必要性】があった。今回の FGI から浮かび上がった選抜学生が授業や実習体験を通して保健師教育に対して抱いた思いは「満足感と不満足感が混在する中、保健師の特徴に気づいたが、就職への躊躇があり、看護師への逃避へと変化しており、基盤には保健師を目指す準備の必要性があった」という理論構造をもっていた。

V. 考察

結果から A 大学における選抜教育の課題として①保健師専門職への興味関心の喚起、②保健師として就職する関門の突破③保健師の質の担保に向けた教育プログラムの構築の 3 点が考えられた。

1. 保健師専門職への興味関心を喚起

保健師選抜に応募した理由はほとんどが「多くの資格が欲しかった」、「親等からの

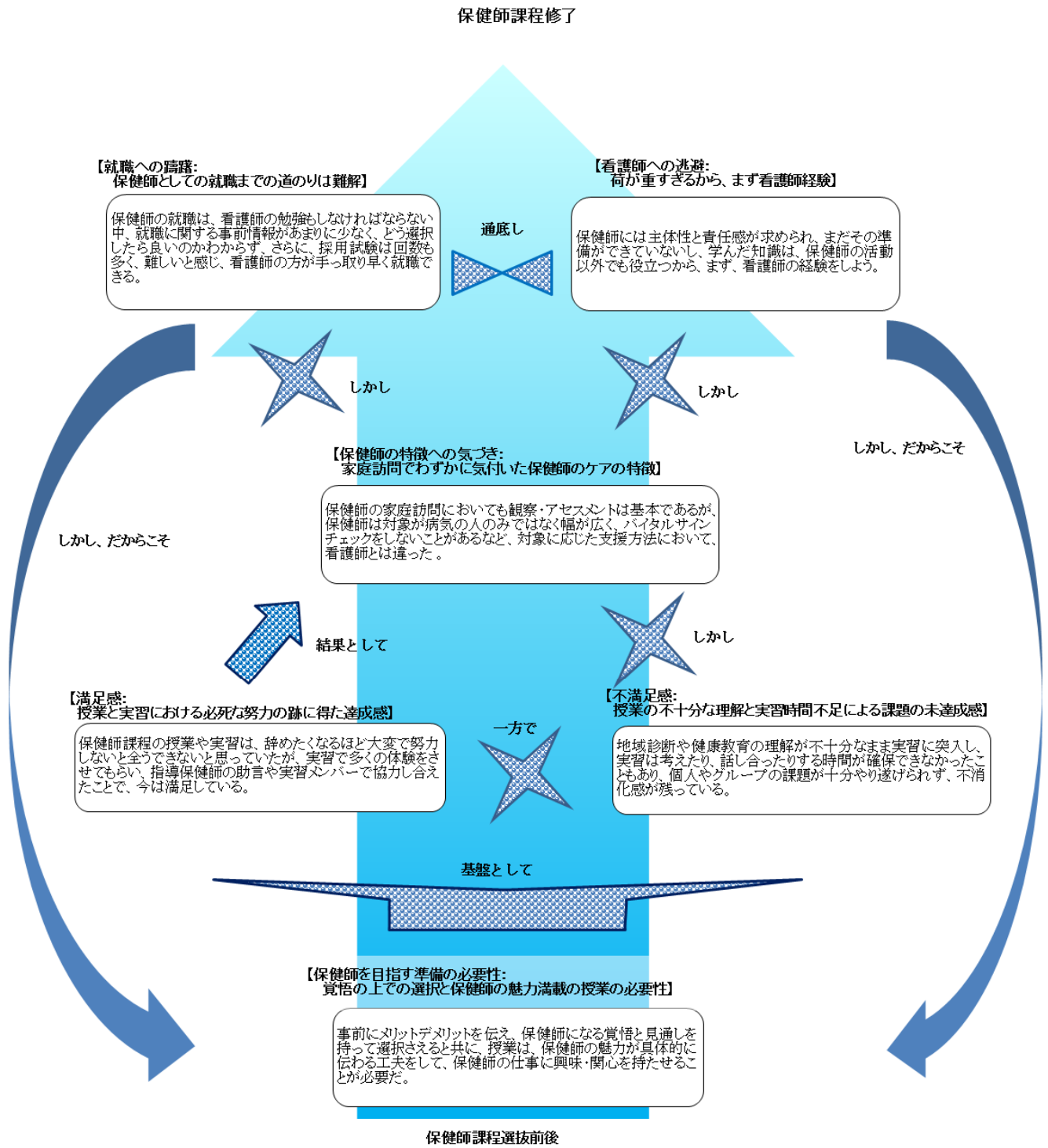


図1 選抜学生が授業や実習の体験を通して保健師教育に対して抱いた思い

1. 2015年3月4日
2. 梅花女子大学
3. 学生へのフォーカスグループインタビュー 逐語録ラベル110枚
4. 上田・高畑・三輪

勧め」であり、保健師選抜学生の多くは4年間での複数の資格取得を目的としており、自分の意志よりも親の影響が大きく影響していた。前田ら(2014)は入学前から保健師という職業に対し関心が高い人は保健師に憧れを持ち、保健師への目的意識が高い、自分の意志よりも周囲の勧めの影響が大きい人は将来の職業選択を自己決定する意識の低さがあると述べている。このことから、入学前から具体的な専門職として保健師のイメージがもて、親ではなく、自分で選択できるように高校生への出前授業やオープンキャンパス時に保健師の専門性について広報活動を強化することもその一つの解決策になると考えられた。また、(岸, 2013)は選択制のデメリットとして、看護師教育課程の講義で学んだことのみから保健師を選択しなければならないと述べている。A大学において選抜学生が保健師の専門性を理解した上で選抜にエントリーするには入学後の看護師必修科目である「地域看護学」や「地域看護学演習」において、「保健師は看護師教育課程を基礎とし、その積み上げとして教育される専門職であることを強調した上で、保健師の魅力や専門性について分かり易く伝える」必要があり、看護師教育課程における地域看護関係授業の重要性が示唆された。

一方、選択学生の方が他の学生に比べ成績はやや高かったが、「これだけ大変なことをすることを(選抜前に)提示して、覚悟させておく方がよい」、「途中でやめたくなるほど大

変だった」との意見もあり、学生が自ら選抜に応募しているにもかかわらず、学習に対して意欲が減退し、消極的な姿勢となっていた。保健活動に必要な知識や技術を理解するには、現象のみではなく、その背景にある抽象的な要因を把握する洞察力、認識力が求められ、ある程度の基礎学力と思考力を有していることが必要である。併せて、保健師という専門職に対する興味関心も重要となる。

これらのことから、選抜方法を従来の保健師教育に関連する専門科目の成績のみでなく、①1年生からの通算成績や通算GPA、②小論文、③面接(応募動機や覚悟等)に変更することで、基礎学力、思考過程、動機、学ぶ意欲等を確認することができ、保健師の専門性について学ぶ意識や姿勢が強い学生を選抜できると考えられた。

2. 保健師としての就職する関門の突破

保健師採用試験に向けては「公務員試験模試」、「採用試験についての情報提供」、「エントリーシート・面接訓練」等の支援を求めている。また、「保健師として就職するにはいくつものハードルを越えなければならないという負担感が先行し、保健師として就職することへの戸惑いと迷い」があり、「保健師として就職しなくても学んだことは活かせるから『看護師として就職しよう』と、保健師として就職しないことを正当化しようとする思い」があった。綾部ら(2012)は保健師になる可能性が高い学生が保健師になれるよう、教員及び就職支援室などの大学の就職支援に

関する資源を最大限活用することが望ましいとしており、保健師の就職試験は6月の早い時期から始まること、看護師のようなインターンシップがないことを鑑みると、従来以上に大学のキャリア支援センターとの連携を強化し、できるだけ早期から公務員試験に向けた準備を実施させ、自信を持って採用試験に臨める支援が必要であると考えられた。また、実習のみでは就職先の保健師の仕事内容が可視化できないこともあり、公務員ではあまり一般的ではないがインターンシップ制度を取り入れてもらえるように大学のキャリア支援センターから都道府県や市町村への働きかけが必要ではないかと思う。

3. 保健師の質の担保に向けた教育プログラム

1) 選抜教育における授業及び実習の展開

選抜学生は「保健師課程は看護師課程や養護教諭課程と同時に授業を受け、課題も多く、同時進行で大変だった」、「授業の理解不足や時間不足により、理解が浅く自分のものになっていないという満たされないモヤモヤした不満足な思い」というように学生のキャパシティを越えてしまい学習内容に辛さを感じていた。

全国保健師教育機関協議会版(2014)保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ(卒業までに全学生が必ず修得する最低限の技術:以下MR)では保健師教育における高度実践能力の育成は教授内容をより深く・広くするものであり、看護師教育課程から保健師教育課程へと深く(知識から、実践できる

レベルあるいはより正しく判断できるレベルへ精練する)及び広く(関わる対象の領域や集団、関わる対象の健康レベル、対象に関わる機会と場、活用する知識や技術の広がり)学ばせる必要があると述べている。選抜学生は3年生前期に看護師教育課程の概論や援助論と保健師教育課程の概論活動論が同時進行していたことから、知識の深まりや広がりを積み上げて学ぶことができなかつたことが大変な思いやモヤモヤした不満足感につながっていたと考えられた。これらから看護師教育と連動させて、保健師教育が深まり、広がりが持てるよう、順序性を考えたカリキュラムへと変更する必要性が示唆された。

また、岡本ら(2012)は保健師を志す学生が、保健師教育課程に求められる技術を修得し、一定水準以上の質を備えるには適正な保健師教育プログラムの構築が不可欠であり、MRは保健師資格の質保証を行う上で意義深いと述べている。今後の改善策としては、教育の目的・目標を設定、特に実践力を養成する活動論のシラバスや実習の行動目標、さらに評価測定にはミニマム・リクワイアメンツを活用することも考える必要がある。

保健師の活動は可視化しにくく、学生に保健師の魅力を教員のみで伝えるには限界があるため授業に現場保健師の参加を要請し、その実践活動をリアルに学生に伝える場を設けることで学生は保健師についてイメージ化ができ、授業の理解も深まりやすいのではないかと考えられた。同時に、教員は学生が保健師の活動を可視化できるようケースメソッド、

TBL (Team-Based Learning) など学生が興味関心をもって主体的に学習できるアクティブラーニングの手法を取り入れるなど授業の創意工夫をする努力も併せて必要である。

2) 保健師の専門性

選抜学生は実習での家庭訪問を体験する中で「基本は看護師と同じであるが、あらゆる健康レベルの人を対象とすること、必ずしもバイタルチェックしないこと、対象のニーズに合わせて援助方法を変化させていることに特徴がある」と語っていた。このことは、「保健師の個人・家族の援助方法は地域で生活する健康な人から疾病を持った人まであらゆる健康レベルを対象とし、その関わりは対象がその人らしく地域の中で生活できるよう支援する」という保健師の特徴を学びとっていたといえる。家庭訪問は実習指導者が実践しながら活動の醍醐味を伝えやすいこと、地域診断よりも保健師の特徴が可視化しやすいこと、授業においても概論や演習を通して実習につながるよう工夫したことなどが学びにつながったと考えられた。

一方、保健師の専門性を強化する学習内容である地域診断については「事前学習では数値や資料がなく、実習中は過密で整理する時間がなく十分に学べなかった」、「事前学習と実習のつながりが持てなく、達成感がなかった」と地域診断の学習内容の理解に深まりがなかった。地域診断は事前準備に十分な時間が確保できなかったこと、実習地における地域診断のエリアが市単位であり、課題化、活動計画樹立が総花的になったこと、実習指導

者が実践しながら活動の醍醐味を伝えにくいこと、演習は実習とは地域診断のテーマが異なったこと、などが学びを阻害していたと考えられた。

高橋ら (2014)は、保健師として就業する前に必要な経験として、家庭訪問や地域診断を挙げており、経験を通して家庭訪問では「実践的な対人支援能力」、地域診断では「地域ケアマネジメント力」を学べると述べている。また、全国保健師教育機関協議会 (以下全保協) (2014) は保健師が卒業時達成度として6つの実践能力 (Ⅰ.地域の健康課題の明確化と計画・立案する能力、Ⅱ.地域の健康増進能力を高める個人・家族・集団・組織への継続的支援と協働・組織活動及び評価する能力、Ⅲ.地域の健康危機管理能力、Ⅳ.地域の健康水準を高める社会資源開発・システム化・施策化する能力、Ⅴ.専門的自律と継続的な質の向上能力、Ⅵ.公衆衛生看護の対象と活動の場に応じた対象別実践能力) を挙げている。

本研究では学生の認識を中心に研究しているため、卒業時達成度については客観性に欠けることが前提ではあるが、家庭訪問の実習から「実践的な対人支援能力」の素地はできたが、実習における地域診断から「地域ケアマネジメント力」の実践能力は学べず、よって、個人・家族・地域を連動させて地域を捉えるには至らなかった。6つの実践能力については「Ⅰ.地域の健康課題の明確化と計画・立案する能力」に限っては「卒業時到達度レベルⅢ (学内演習で実施できる)」程度の学びがあったが、残り5つは到達レベルⅣ (知

識としてわかる)程度 of の学びであり、保健師の専門性について6つの実践能力すべてを学ばせることができていなかったと推測された。

今後は6つ実践能力については、MR(全保協,2014)を活用して卒業時達成度を客観的に評価し、選抜学生の到達度を明確にすることが課題である。また、教員はこのことを実習指導者と共有化することで大学での保健師教育が現場での現任教育へと継続し、キャリアパス・キャリアラダーへと発展させていくことで、選抜学生の保健師の専門性の学びを深めることにもなると考えられた。

3) 選抜制保健師教育課程の限界

看護系大学統合カリキュラム学生への調査では、大学進学理由は「保健師・看護師両方の資格がとれる」が約4割(佐藤,2012)と資格取得重視志向があった。本研究においても選抜教育に応募した理由は「多くの資格が欲しかった」が約8割と統合カリキュラム学生よりも選抜学生の方がその傾向が強かった。統合カリキュラムから選択制に変更されてもなお、保健師の専門性に対する内容や魅力についての関心や意識は薄く、そのことが選抜後の学習意欲や主体的な学習姿勢に影響していることも考えられた。

保健師教育は①看護師教育から保健師教育へと深く、広く学び、専門性を積み上げる内容と、②新たに保健師の専門性として学習する内容がある(全保協,2014)と述べられている。このことから、保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度を高めるには看護師教育の授業との順序性を勘案し、さらに、保

健師の専門性について新たな理論を学習させ、実習では看護師教育の理論及び新たな保健師教育における理論を踏まえた上で、理論と実践を反復させることが必要となる。しかし、選抜学生の資格取得重視志向や卒業時の達成度を考えると、学士課程4年間で看護師、保健師の2つの資格取得させる教育システムでは学生の意欲減退や学習負担感が増えることになり、看護師教育、保健師教育共に高度実践能力の育成が目指せず、選抜教育において保健師の専門性を教授することには限界があると考えられた。

VI. 研究の限界と課題

本研究の対象者である学士課程選抜学生は人数が限られ、研究においては1大学における質問紙調査、フォーカスグループインタビューのみでデータ収集を行ったため、現状の一側面は表しているが一般化は困難である。研究の妥当性、信頼性の確保を得るには、毎年度同様の調査を実施して経年変化を分析すると共に、全国の教育機関における選抜学生の調査を実施する機会を得ることが必要である。

おわりに

本研究で課題が明確となり、2013(平成25)年度入学選抜学生(IV期生)への改善点として授業は看護師教育課程の実習終了後の3年生後期後半集中とし、実習施設の保健師さんに授業のゲストスピーカーとして参加いただいたことにより、選抜学生は保健師活動

の可視化ができ、保健師への興味関心も高くなり、公衆衛生看護学実習においては積極的な取り組み姿勢へと変化した。また、2014(平成26)年度入学選抜学生(V期生)の選抜は1年生からの総合点、GPA、面接、レポート提出に変更したことにより、保健師志望の学生に焦点化した選抜が可能となった。今後は、選抜教育の達成度の評価測定を積み重ねながら保健師教育大学院化に向けた基盤づくりをしていきたい。

謝辞

本研究の趣旨を理解しご協力いただいた選抜学生に感謝致します。また、看護学科教員には学士課程で看護師及び保健師教育課程、養護教諭課程の3課程を同時進行するにあたり、カリキュラム改正や編成の工夫など保健師教育課程への過分なご配慮をいただき感謝申し上げます。

文献

綾部明江,富岡実穂,木下由美子,他(2012) : 保健師志望学生が望む保健師教育のあり方—A大学4年生の意見を通して—,茨城県立医療大学紀要,17,51-58.

一般社団法人全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会編(2014) : 保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機関版(2014)-保健師教育の質の保証と評価に向けて-,1-134.

岡本玲子,佐伯和子,今井睦子,他(2013) : ミニマム・リクワイアメンツを教育の指針に,

保健師ジャーナル,69(9),692-697.

岸恵美子(2013) : 教育側からみた保健師選択制への期待と課題,保健師ジャーナル,69(9),685-691.

佐藤公子(2012) : 保健師教育の課題と方向性—看護系大学総合カリキュラムに対する学生の意識—,第42回(平成23年度)日本看護学会論文集 地域看護,213-216.

高橋香子,末永カツ子,栗本鮎美,他(2014) : 東北大学大学院医学系研究科保健師養成コースの開設について(第1報)—修士課程における保健師教育に求められること—,東北大医保健学科紀要,23(2),53-63.

前田則子,児玉なぎさ(2014) : A 大学看護学生の保健師志望の現状と課題,鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要,18,62-67.